



Title	「世界文学講義」と研究会・10周年の報告
Author(s)	八木, 浩; 友田, 舜三; 正木, 恒夫 他
Citation	大阪外国語大学学報. 1984, 64, p. 497-506
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80997
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「世界文学講義」と研究会・10周年の報告

八 木 浩・友 田 舜 三
正 木 恒 夫・南 田 みどり

A Decade of Studies and Lectures on 'World Literature': A Report

Hiroshi YAGI Junzo TOMODA
Tuneo MASAKI Midori MINAMIDA

大阪外国語大学で外国語を研究・教授しつつ、さらに重要なカリキュラムの柱として外国文学を研究・教授しているが、それぞれの研究・教授がばらばらで、お互いに関知しないのはたいへん残念なことではないか、もしわたしたちが少しでも全体のために時間をさくことができると、どんなにお互いを益するだろうということになって、研究会を始め、その成果を授業にももっていくということになった。まったく自主的に、できる条件のある人がにないながら、誰にでも開かれた形で研究会がすすめられ、時には不活発なこともあったが、2カ月に1回は開きたいということで、さかんに続けられた年も多かった。最近では東独演劇論（八木）、シェイクスピア（正木）、黒人文学論（池上）、ビルマ文学論（南田）、ベルシャ文学論（香川）、アフリカ文学論（宮本）、マルケス論（吉田秀太郎）というように、つづけられている。

大阪外国語大学が教育・研究面で直面している2つの問題の一つは、言語・文学・文化・政経という4本の柱をたてて諸学科の研究を行うにさいし、その柱間の学問をどうするか、ということである。その学際的課題については、各学科の中でいろいろ試みられている。その例はこれまでの既存の古典にもみられ、また新しい学際的研究がひろく試みられているので、ますます大きな課題になっているといえよう。もう一つの問題は、例えば文学をそれぞれの外国語を用いて研究しているが、その地域的な限界をこえて影響しあったり、法則的であったりするものについての学問をどうしているかである。それには比較文学、世界文学、一般文学というような研究がさかんだし、方法論的にもロシア・フォルマリズム、構造主義、コミュニケーション理論など、たいへん国際的にアクチュアルなものがある。

文学でのこのような問題提起は、戦後しばらくして起った木曜会、学内学会などでなされたし、若干の発表や討論もあったが、残念ながら継承的になされたものではなかった。また外大での文学研究を授業の面からみても、大きな欠陥として、文学理論や方法論の基礎科目の不足が指摘さ

れよう。他方、長所としては、言語、文化、政経との関連を考えうる点があげられよう。後者は外大での研究・教育の大きな利点であり、古い専門主義からの脱皮が早くから可能であったのもこのことに負っている。

学部での試みと並んで、大学院でも、設立の年度からいろいろの試みがなされてきた。そのテーマをあげてみるに、1) 各国の文学、2) 19・20世紀のリアリズム文学、3) ルネッサンスの文学と日本、4) 東西の比喩・象徴、5) 世界の演劇と日本、6) 東西文学のジャンル、7) 世界文学の素材と形成…などである。

学部でも大学院でも研究会の記録が不正確になっているので、今回は10周年を迎えて、第6回世界文学講義を開くにあたり、隔年のこれら6回の世界文学講義の報告のみをまとめておきたいと思う。それぞれ2回づつまとめて3章にするが、それは始めの2回が手探りの状況であったに比し、次の2回が頂点をなし、またあとの2回が新学舎での再出発をなしていると思ないうからである。講師陣も最近の2回ではたいへん豊富になり、広く世界に及び、また若い世代の参加が目立ってきた。

(1)

1973年度：現代欧米文学の展望（第1回）

主として20世紀の英、米、仏、伊、独、西、露の小説を7人が担当した。「この講座は、欧米7カ国の現代、とくに第2次大戦後の文学を展望することによって、一方では文学作品が、各国の特殊な歴史的・民族的諸条件と深くかかわって形成される過程を観察しつつ、他方では現代の状況に対応する精神活動としての現代文学の、普遍的な傾向や問題性を探究しようとするものである。この探究の過程において、外国文学研究の基本的な態度や方法が問題にされるはずであり、従ってこの講座が、ゼミにおいて欧米諸国の文学を専攻しようとする学生のために、入門的役割を果たすことが期待される。」

われわれは1945年から1970年代に至るヨーロッパ・アメリカ文学を、1) ジャンル、技法の特色、2) 文学と社会のかかわりの面、で考察する。講義であるが、形式としては、文学作品の例をとって討論を交え、ゼミナールに近づける。講師は7名が交替する。レポートの発表会をひらこうなどと話しあわれた。講師は総括会議をやり、毎月の検討会を行うなどと積極的なことが決ったが、実際は忙しくてそうはいかなかった。

学生に与えられた文書によると、作品を当該語科の学生は原書で読むことをたてまえとする。邦訳は生協で販売するので早目に読了しておくこと。文学一般の参考書は、ルカーチ：『批判的リアリズム……』、フィシャー：『芸術はなぜ必要か』など。各国3回の授業のうち2回は教師による講義、1回は学生を中心とする討論を行う。討論は原則として当該国語を専攻する学生グループによる報告を中心にする。だいたいその通り進んだのであるが、原書で読むというの

は、やはりむつかしかったようだ。

担 当		テ キ ス ト	内 容
正	木	アラン・シリトー『土曜の夜と日曜の朝』	イギリス文学における労働者像の問題
原	田	ボーボワール『他人の血』	自己・他者連帯の問題、実存主義の人間観
荒	谷	現代イタリア短篇集	戦後イタリア・リアリズムの問題
池	上	ボールドウィン『ナット・ターナーの告白』	アメリカ文学における黒人の問題
八	木	ベル『九時半の玉突き』	ナチズムと戦後ドイツ文学
吉	田	現代ラテンアメリカ短篇集	南アメリカ諸国の短篇にみる今日のラテンアメリカ
武	藤	ソルジェニーツィン『イヴァン・デニソヴィチの一日』	社会主義社会の問題と文学

始めの時間に、旧外大学舎のC 1という最大の教室に全教師集合、はりきって、わが文学はいかんとばかり、一人一人が自己の問題を語った。出席はとらず、出席者は減少したし、無関心な者もめだち、もっと厳しい方がよいとの意見も出されたが、学生による評価は一般に良好で、再開が望まれた。出席者とレポート提出者は、E (40-25), F (20-15), I (5-2), D (8-5), S (5-3), R (20-17), その他 (15-10), 2部では、E (15-8), R (8-4), D (7-2), F (8-1), C (2-2), S (0-0) であった。学生の発表は、なかにはたいへん優秀で積極的なものもあり、また気力に欠けるものもあった。読んでいないとわからないので欠席がふえたのであろう。語科生が自分の学科の作品を扱う時は、原典や文献が尊重されたが、そうでない時は比較文学の方向が強められた。1月の授業は10枚でいどのレポートを要約報告しあい、討論が活発になった。それをしないと単位を出さぬことにした。各先生方もそのたびに御出席ねがったのでたいへんな苦勞であった。痛感したことは、世界文学か比較文学かの結論が弱いこと、長編・短編の形式面での研究にも不足していることである。

長編小説の場合、シリトー、ボーボワール、ボールドウィン、ベル、ソルジェニーツィンの比較が可能であったが、短編の場合、長編に比べ理論上の困難も目立ち、列挙的になりやすかった。これら多くの短編には一定の形式上の要素があり、なかでもショート・ストーリーは重要で今日の世界を先取しているのであるが、それを講ずるのはむつかしかった。

長編では英国労働者の疎外状況、フランス国民のレジスタンスと実存、黒人の状況とユートピア、ナチズムの克服と内面的苦悩、文学の対象としてのスターリニズムというように、今日の課題は大きく明白であった。技法も19世紀的な手堅いものから、モンタージュや同時性をへて、シュールリアリズムの加ったものに至るまで、つかみやすいものが目立った。

1975年度：世界文学の古典（第2回）

第2回はテーマの設定にあたって論争があった。はじめ、「変革期における世界の文学」というテーマにしていた。ルネッサンス、コミュニケーション、ロシア革命、1930年代などをみつめつつ、アジア、日本を含めて、世界の古典を考えようということであった。比較文学や世界文学に歴史を関係づけることには賛成でも、時代を設定するとなると、そう簡単ではない。研究していないルネッサンスを、などといわれてもむりだ、それに文学と時代についてのそういう意識が共通ではない、というわけで、いろいろ論議の末、「世界文学の古典」というテーマにおちついた。中国文学の参加をえたことが大きな特色である――

担 当		テ キ ス ト
池	田	ダンテ『神曲』
正	木	シェイクスピア『ハムレット』
吉	田	セルバンテス『ドン・キホーテ』
八	木	ゲーテ『若きヴェルテルの悩み』
原	田	スタンダール『赤と黒』
池	上	マーク・トウェイン『ハックルベリー・フィンの冒険』
相	浦	魯迅『阿Q正伝』
武	藤	ドストエフスキー『罪と罰』

古典とは何か。一回目に先生方がそろって出席して語った。第一級の文学の成熟とその社会、その歴史、変革とのかかわりを通じて文学の内容をつかもう、形式美、言語・美術作品の分析や総合もその観点のもとから探ろう、と主張されたことが多かった。

メモによると、作品論を中心に、変革期における文学とはどのようなものか、文学における変革期とは何かということも考える。原則として講義方式で授業を進めるが、随時質疑応答、討論の機会を設けるので、積極的参加を期待する。『神曲』では謙虚に読むことから出発する。600年昔のものを、地獄篇1, 5, 33を中心によみこなす、『ハムレット』では古典のおもしろさ、むづかしさを語る。物の見方、舞台の知識など、いろんなことを知って読むと、たくさんみえてくる。それが大切だ。『ドン・キホーテ』では通俗的に読まず、スペインの黄金時代と世相をとらえ、それを背負い、作者とドン・キホーテを考えたい。『赤と黒』ではルソーにも言及し、バルザックやジードとも比較し、実存と自我を問題にし、いかにあつみをもつようにしてよむべきかを考える。『ヴェルテル』では作品の構造を詳細にとらえつつ問題をつかみとり、いろいろな研究例をあげてそれらと対決したい。およそそういう調子で紹介が続いた。『ハックルベリー・フィン』と『阿Q正伝』には両先生のメモがあるので少し長くなるがしるしてみよう：

マーク・トウェイン：『ハックルベリー・フィン』

A この作品の文学史的意義①アメリカ・ルネッサンス文学からアメリカ・リアリズム文学の

成立の時期で、この作品によって、はっきりアメリカ・リアリズム文学が確立した。②ルネッサンスの時期にアメリカ独立宣言の精神の「復興」の機運があったが、マーク・トウェインはそれをうけつぎ、さらに「奴隷解放宣言」の精神をもうけついだ。

B この作品のリアリズムの特徴。文体への内容の面からのアプローチ。

C この作品に対する批判の紹介。それに対する反批判。

魯迅：『阿Q正伝』

「今回からはじめて中国文学がこの総合講座に入れていただいた。今回は『阿Q正伝』をとりあげてお話をするが、おそらく中国文学は欧米の文学とは非常に異ったものであるだろう。ここではどうしても、1. 伝統文学の性質と近代、2. 魯迅の文学観と『阿Q正伝』、3. 『阿Q正伝』という作品、というようなテーマでお話をすることになるだろう。『狂人日記』、『亭』というような作品をかいてからこの作品に至るまでの魯迅文学の挫折と発展について考えたい。」

第2回目は第1回目に試みられたむりが大いに回避されて、やりやすくなった。学園のむづかしい時期でもあったので、後退した面が出やすかったのだろう。それでも各国中心主義から大きく外に出て、古典とその成立をめぐる、真の内容を考える比較へと一歩ふみだすことができた。参加者数はやや上向きになったと思うが、正確にはつかめていない。外大では現代の文学が中心になるだろうが、古典をしっかりつかんでいなかったら、現代文学の意味もわかるはずがないだろう。

(2)

1977年度：近代散文の成立と発展（第3回）

これまで世界文学講義は、「現代」と「古典」とをとりあげてきたが、第3回目は近代散文の成立と発展に照明をあててみては、ということとなった。イタリア、イギリス、ドイツ、アメリカ、ロシア、フランス、メキシコ、中国、日本の9カ国に限られたが、それぞれの国にとり、近代とはどのようなものであり、それを反映した近代散文はどのような特質をもっているのか、そしてそれは「古典」と「現代」とのなかで、どのように位置づけられるべきなのかなどを追究してみようとした。八木、池上が世話人となり、次のような講義が開かれた：

担	当	テ	ー	マ
荒	谷	『デカメロン』の世界		
正	木	『ロビンソン・クルーソー』		
友	田	『若きヴェルテルの悩み』		
舟 阪	洋 子	『緋文字』		
武	藤	ドストエフスキーの小説の特徴		
原	田	『異邦人』		

吉 田 秀太郎	『ペリキリョ・サルニエン』
相 浦	『狂人日記』
吉 田 弥寿夫	『好色一代男』——近代文学のはじまりとは何か

非常にゆきとどいたレジュメが予め配布された。それぞれ注目されるが、吉田弥寿夫氏のものから少し引用しておきたい。吉田氏は日本の文学の特徴を5つあげ、叙事詩なき古代詩、中国の影響、正統としての和歌文学、源氏物語の先駆的小説性などにふれた上で、日本文学の近代をいくつかからとるかを問う。そのため、西鶴の『織留』と二葉亭四迷の『浮雲』を比較した上で、以下のように論じていくのである。これによってわたしたちが、どんなに外国の文学がみつめやすくなるかが明らかであるので、少し長いが引用したいと思う。それぞれの講義にも、力のはいった解説が付いているので、詳しくはそれをみてほしい。

『きわめてあらい比較をすれば、封建的支配体制がゆるんだ後に、100年戦争が続き、異質文化の衝撃によってルネサンスがおこり、近代化への道を歩んでゆく。これがヨーロッパの標準的な歴史の推移であるならば、日本の安土桃山時代から近世への時代的变化を、近代化とみなしていいのではないか。文化現象もそれにふさわしい様相を呈していると考えられる。

儒教や仏教でやむなく必要として認めているセックスの世界を、子孫繁栄のためという家の道徳をまったく拒否して、ただひたすら快楽のためにだけ追求する一代男の世之介は、「54歳までたはぶれし女3,742人、女人のもてあそび725人」という上昇期町人階級のイデオログとして、意気軒昂たるところを示す。そしてヨーロッパのドン・キホーテのごとく、好色の馬を馳って日本国中津々浦々まで、女性を味わいつくし、なお、それに満足せず伊豆の国の南方に女護島があると聞いて、難波江の小島で新しき舟をつくらせて好色丸と名づけ、昔なじんだ遊女の下着で吹貫をこしらえ、女性の髪の毛をよったともずなを張って、女のつかみどりに出かけるのである。いけすにはなったどじょう・午房・やまのいも・卵をはじめとする強壮剤や催淫剤、女性に見せるための枕絵・伊勢物語、閨房の責め道具、百筋のふんどし、4,500斤の鼻紙などのこまかい数量や精密な記録をみていくと、まさに近代写実主義小説の手法といわざるを得ない。しかし、その華々しき出帆も、無事に女護島へ到着したのか、そして女どもに歓迎されたのか、用意したかずかずの品物が役に立ったのかという読者の疑問に答えず、「行方しれず成にけり」で終る。これは晩年の「置土産」などに出てくる「さらりと世をば過しける」という末尾の文とおなじである。さらに注意すべきは、「不死の薬は与ふべし、暫くここに待てしばし、柴山の雲となつて立ちのぼる富士の嶺の行方知らずなりにけり」という「謡曲、富士山」の文章を通して『竹取物語』の世界へ回帰してゆくのである。世之介が『源氏物語』の光君のパロディであることはいうまでもない。

時代の批判者であるべき作家が、みずからを戯作者とよび、事実、作品も時代が降るにつれてエログロ・ナンセンスとなっていた原因は何であるのか。これは徳政令その他によって、町人

の経済的基盤が安定せず、大型鋼鉄船の建造禁止、大河への架橋禁止、したがって鉄道の未発達という鉄鋼産業が発達する条件をまったくもたぬ近世町人は、結局、商業資本家にとどまらざるをえなかった。すなわち、封土から上納される年貢米をできるだけ安く買い叩くことによって利潤をあげてゆくという、熱烈な封建経済の維持者としてしか、階級の立場を保ちえなかった。この矛盾の反映が西鶴文学を西欧のそのような近代文学たらしめえなかったのであろう。』

1979年度：「近代文学とその発展」（第4回）

この年の世界文学講義に顕著な点は、東洋語系の教官による講義が増えたことである。前回のイタリア、イギリス、ドイツ、アメリカ、ロシア、フランス、中国、日本の他に、ビルマ、モンゴル、デンマーク、スペインが加わり、12カ国の文学がとりあげられることになった。これでやっと内容的に真に「世界文学」といえるものにまた一步近づいたと言えよう。統一テーマとしては、参加者のコンセンサスを得にくかったことから、領域を広くとり、前回の継続という形で、「近代文学とその発展」となった。開講にあたってまとめられた講義要旨がたいへん念のいったものになった。その冒頭の言葉を引用しておくが、詳しくは講義要旨を参照していただきたい：

『外大ならではの講義を、という要望に答えて開講された「世界文学講義」も、「現代」、「古典」、「近代散文の成立」というテーマを経て今年の「近代文学の発展」にたどりついた。今回は、参加国も12を数え、特に東洋が4カ国に増えて、「世界文学」という名にふさわしいものになりつつある。複数教官の講義という形式は、常に解体の危機にさらされた、難しいものであり、それを支えてゆくのは、参加される方々の熱意のみである。講義する方も、聴く側も、このことを肝に銘じておきたい。』

次に担当とテーマを掲げておく：

担 当		テ ー マ
荒 谷		イタリアにおける近代小説の成立と展開（フォスコロとマンゾーニ）
堀 内		『ベルナルダ・アルバの家』
法 橋		トルスイとドストエフスキー——処女作の世界——
舟 阪 洋 子		マーク・トウェインの『ハックルベリ・フィンの冒険』
内 田		『息子と恋人』
岡 田		デンマーク近代文学とその発展
友 田		『ヴェニスに死す』——トーマス・マンにおけるイロニーとパロディー
赤 木		フランスの近代小説と現実
原 田		小説『血の絆』——文学にみるビルマのナショナリズム
山 口 幸 二		モンゴル現代文学の成立について

中 川	中国近代文学とその発展・『狂人日記』、『白毛女』
吉 田 弥寿夫	日本の近代小説——自我の確立と放棄

(3)

1981年度：「現代の世界と文学」（第5回）

この年には、開講にあたって、有志参加者の間で、まずテーマが設定され、その解釈をめぐってさまざまなアスペクトがとり出された。各文学の立場を、会議記録から紹介する。

- 文学作品をもとに、現代の混沌の中で、「人間とは何か、自己のアイデンティティとは何か」を模索する作家や人間像を扱う。（フランス）
- 現代社会を背景に、民族的アイデンティティを問う傾向が文学に見られる。それを順次、文学者と作品を挙げていくことにより解説する。（アラビア、ビルマ）又は、作品分析を通して、人間存在にどこまで切り込んでいるかを見る。（中国）
- 現代性は、古典的現代（20世紀前半期）の文学を、どのように現在の状況の中で受容するかという問題でもあり、その視点から、ロシア文学では、マヤコフスキーの現代社会とのかかわりを扱い、スペイン文学では、バジェ・イン克蘭の評価の問題を扱う。
- 文学の社会的アプローチでは、ドイツ文学では、60年代後半におこったパラダイムの変遷に伴う文学の社会的位置付けと、その動きの中で出てきた労働者文学集団＜作業集団文学＞を扱う。イギリス文学では、歴史的に社会の変動と、文学創造の豊かな時期と不毛な時期とが対応している現象に触れ、現代の英国文学が、なぜ「不毛」なのかを問う。

次に、この年の講義のテーマと資料をかかげておく：この年も詳しい講義録があるので、それを読んでいただけると幸いである。

担 当	テ ー マ と 資 料 な ど
友 田	「作業集団・労働世界の文学・その成立と実情」 —Marianne Selke 『鉄板焼フランクフルト 1マルク50』 —Joke Koch 『よかったね、おかげさまで。ある旅日記』 —Horst Hensel 『まあ、名づけるならベアーテとトーマスというところか』
原 田 武	「現代フランス文学における人間像」 ビョートル『時間割り』（中公文庫、清水徹訳）
正 木	「現代イギリスの社会と文学——文学における生産性とその条件」 ——現代イギリス文学はなぜ不毛か—— 『新潮文学小辞典』（新潮社）

池 上	「50年代以後のアメリカ黒人文学」 —『アメリカ黒人の解放と文学』（新日本出版社） —本多勝一 『アメリカ合州国』（朝日新聞社） —本田創造 『アメリカ黒人の歴史』（岩波新書）
堀 内	「Valle-Inclan のエスベルペントについて」 登場人物に対する作者の視点及び表現上の手法についてくわしく考察していく。テキストには『ボヘミアの光』（1928）を用いることが翻訳はない。
田 中	「ウラジミール・マヤコフスキと私たち」 マヤコフスキ選集（飯塚書店）
是 永	「現代中国の混迷と文学状況」 —相浦 晃 『現代の中国文学』（NHK ブックス） —竹内 実 『現代中国の文学』（研究社叢書）
南 田	「ビルマの社会と文学——独立闘争と文学——」 『世界名作短篇集・東南アジア編』新日本出版社、蔵原惟人監修
池 田	「現代アラブ文学」 『月刊言語』8 1980. vol. 9. no. 8. 『現代アラブ小説全集』（全10巻）河出書房新社 『アラブ文学史』、関根謙司、六興出版 『現代アラブ文学選』、野間宏編、創樹社
山 口 幸 二	「モンゴル現代文学の成立。戦後日本文学及びアジアとの関わりにおいて」 『戦後文学とアジア』（日本アジア・アフリカ作家会議編）

1983年度：「現代世界と文学」（第6回）

欧米7カ国によって出発した世界文学も、今年度はいわゆる第三世界が半数以上を占めるに至った。テーマは前回と同じものとし、前回のスペイン、アラビア、日本にかわってイスパノアメリカ、アフリカ、ペルシアが登場する。講義題目及び担当は、以下の通りである。

担 当	テ ー マ
正 木・八 木 友 田	オリエンテーション
宮 本	現代アフリカ文学の諸問題
相 浦	魯迅の散文詩集『野草』について
香 川	イラン革命と現代文学
南 田	現代ビルマ文学の課題
山 口	現代モンゴル文学について

吉 田 秀太郎	イスパノアメリカの現代文学
池 上	黒人女性作家の活躍（米）
友 田	トーマス・マンとブレヒトの比較
岩 間	サンボリズムの詩人
田 中	ウラジミール・マヤコフスキーと私たち
大 橋	ウィリアム・ゴールディングの人間に対する暗黒の意識

評価の手段は従来、出席日数と年一回のテスト又はレポートであったが、今年は出席日数とレポート2回にした。前期はアフリカ文学からモンゴル文学迄、「アジア・アフリカ文学の今日的課題をいかに考えるか」というタイトルで、後期はイスパノアメリカ文学からイギリス文学迄、「欧米文学の今日的課題をいかに考えるか」というタイトルで、各参考文献を資料に、400字詰10枚で論じさせることになっている。

レポートを二回に分けたのは、各国文学の背景や課題の相違にもよる。かつて植民地又は従属国であった国々の文学の課題は、その国の政治や歴史と密接なかわりを持つ。又、中国を除けば、それらの国々の文学作品の翻訳や紹介は、欧米文学のそれに比べて遙かに少ない。明治以来の欧米偏重主義のなせるわざでもあろう。欧米文学は、個々の作品や作家論を講じても、予備知識を既に備えた学生達には理解されやすい。しかし第三世界の文学は、その政治的歴史的背景や文学的潮流を解説することが、個別的問題を講じる前の段階として要求されるのである。そういう点では、イスパノアメリカ文学を後期に入れるべきであったか、論議の余地がある。

現在モンゴル文学の講義を終って、第一回レポート提出を待つばかりである。レポートの内容が数カ国にまたがることも予想されるので、評価については担当者間でさらに検討を重ねたい。